

【平成28年9月28日 読売新聞 夕刊】



エコバッグの配布に協力する修学旅行生たち（京都市山科区）

環境への思いやり 京土産に

9/28 読売(7)

京都市は今年から、修学旅行で訪れた小中学生にオリジナルのエコバッグを無償配布する取り組みを始め、同市ではエコバッグ利用が広く定着しており、年間10万人が訪れる修学旅行生にもエコ削減への協力を求め、環境保護の意識を高めることが目的だ。

約100名の修学旅行生専用エコバッグ（縦30センチ、横35センチ）で、白地に水色の文字「DO YOU KYOTO」と記した。この言葉が、1997年に京都市で開かれた国際会議で世界的に地球温暖化防止に取り組む「京都議定書」が採択されたことを受けて海外では環境にいいことをしていますか？との意味で使われることもあり、市は環境施策をPRするキャッチフレーズにしている。各学校に送る形で配布の条件は、買い物時に使用し、レジ袋や紙袋は受け取らないことなどで、これまでに全国100

市、修学旅行生にエコバッグ配布

1校から申し込みがあり、計約1万2000枚を配った。28日に清水寺を観光した東山区立第一中学校の3年生小川昂彦さん（15）は「目立つバッグなので、ちゃんと活用しよう」と意識する。旅行から帰っても使いたい」と話した。今年13、15日に3年生201人が訪れた東山区立第一中学校の伊藤雅夫校長は「体験学習として実践すること、生徒の環境への意識も高まった」と話す。

京都市は昨年10月、食品売り場の福原が、チェーン店の場合は食品売り場の合計面積が1000平方メートル以上のスーパー全96店を対象に政令市で初めてレジ袋を有料化する11月の調査は、スーパーでレジ袋を使わない人が半数に達している。

市の担当者は「エコへの意識を高めてもらい、帰ってからも家や学校でも実践してもらいたい」と話す。

【平成28年10月4日 京都新聞 夕刊】

京でエコ修学旅行を

「環境学習」を切り口にした修学旅行の誘致に、京都市が力を入れている。京都を訪れる小中学生に市がエコバッグを配り、学校には環境に配慮した取り組みを求める手法。バッグには、国際社会が地球温暖化対策に取り組むことを誓った「京都議定書」が生まれた地をアピールする文言をあしらう。温暖化対策の新たな枠組み「パリ協定」が発効する動きに合わせ、かすみがちな京都議定書のPRにもつなげる狙いだ。

市が誘致、議定書PRへ

市は「京都エコ修学旅行」と銘い、備前ラシの持参▽食事の食べ打ち、6月から参加校の募集を始め、残しをしない」という三つに取り組み、市がエコバッグを無償提供、組むことを条件とする。市運営のする代わりに、バッグを京都滞在「ホームベース」きょうと修学旅行中に持ち歩き、レジ袋をもらわぬ「ナビ」などで参加を呼び掛ける。



エコバッグを持ち、清水寺近くの福原を巡る修学旅行生たち（京都市山科区）

環境体験条件に バッグ無償提供

9月末時点で約170校（計約1万4千）が申し込んだ。参加校が初めて入浴した9月6日以降、メッセージ入りのエコバッグ（縦36センチ、横35センチ）を同じに掛け、観光地を巡る小中学生が増えている。バッグには京都議定書の採択をきっかけに生まれた「DO YOU KYOTO」（「環境にいいことしていますか？」の言葉をあしらった）。

東山区の清水寺近くを見て回った東京都東大和市の中学3年小川昂彦さん（15）は「目につくデザイン」のバッグなので、ほかの修学旅行生にも環境に良い取り組みを伝えられる」と笑顔を見せた。中学生は、京都議定書を選択した1997年以後に生まれた世代にあって、正木あみさん（15）は「京都議定書はよく知らないが、学ぶきっかけになるかも」と話した。

修学旅行はリゾート観光につながる契機になるだけに、各地で誘致を競い合う。京都市内には年間100万人以上の修学旅行生が訪れるが、市こみ減量推進課は「京都を訪問先に減んでもらう付加価値の一つとなるよう、プログラムの工夫や情報発信を強めたい。パリ協定の先駆けとなった京都議定書の意義もアピールしたい」とし、本年度は2万人の参加を目指す。

（山正紀）

【平成28年9月30日 京都新聞 朝刊】

携帯電話、デジカメ…

家電ごみから **金**メダル

京都マラソン 2018年 から

ごみが輝く金メダルに……。京都市は、市民が分別ごみとして出した携帯電話やデジカメ、カメラなどの小型家電に含まれる金を使い、京都マラソンの優勝メダル作製に乗り出す。「都市鉱山」とも呼ばれる小型家電中の貴金属や希少金属のリサイクルに市は取り組んでおり、その象徴とする狙い。2018年2月の大会で優勝者に贈られる予定。

京都市は09年11月から小型家電の回収を市内の各区役所や支所、商業施設で始め、15年5月から対象の家電や回収拠点を増やした。その結果、15年度は14年度の4・6倍に当たる1111トンの小型家電を回収した。だが今なお、燃やすごみとして出されるケース

メダル作製の過程



が多いという。今回、メダルにリサイクルすることで、ごみ分別への市民の関心を高め、協力を訴える。

東京五輪に先駆け リサイクル象徴に

市ごみ減量推進課によると、作る金メダルは3個で、マラソンの総合男女と車いす競技の優勝者に贈る。回収拠点に持ち込まれた小型家電を民間業者に委託して金を抽出する。さらに、京都市産業技術研究所（下京区）でメダルの表面に金を加工する。

門川大作市長は29日、市議会代表質問の答弁で、「持続可能性」をテーマの一つとする東京五輪・パラリンピックでも同様のメダル作りが検討されていることを踏まえ、「環境先進都市・京都ならではの取り組みを通じて、ごみの減量・リサイクルの推進を発信する」と、五輪に先駆けて挑む意義を述べた。

（岡田幸治）